

# 好奇心が 誕生 進化 生み出す!・動かす!

岐阜市城東通りにある株式会社キュリオ。優れたデザイン力で電動カート、ベビーカー、自転車など、さまざまなモビリティ製品の試作開発から量産化を手掛けています。今回は創業者である代表取締役、高橋陽介さんに、「今社会に必要な『モノ』を生み出したい」との想いを胸に、独自のモビリティデザイン・開発等の追求について伺います。

株式会社キュリオ 代表取締役 **高橋 陽介**さん



SCOO (座るタイプ)



キュリオでは、使い終わって不要になったベビーカーを回収し、再生可能なフレームを生かした再生品を全国の美術館や博物館などの文化施設での再利用を提案しています。昨年一月に開庁した岐阜県新庁舎にも採用されました。また、ペットカートや重い荷物を運ぶカートとして等、次々と再生用途を提案。サステナブルな取り組みにも積極的に取り組んでいます。

## 「SCOO」誕生

高橋さんが次に注力したのが「電動カート」です。「電動カートを作りたいと思ったのは、ベビーカーと同じ思いです。自分が乗りたいと思うスマートなデザインがなかったからです。高齢化社会が今後ますます進む中、需要が高まる市場、今参入する時だと感じました」

平成二十九年、高齢者の方や足の不自由な方の日常の足として、初代「SCOO(スクー)」（座るタイプ）が誕生しました。市場には様々な電動カートが出ています。高橋さんは『気軽に外出してほしい』との想いから、利便性を追求し軽量化しました。折りたたみ、

「幼い頃より車や自転車などタイヤの付いた乗り物好きでした。そういったものでいつかビジネスをしたいと、ずっと思っていました」高橋陽介さん、五十三歳。昭和二十九年創業の高橋製瓦株式会社社長として誕生。大学卒業後は大手ゼネコンに勤務。当時はアメリカ諸国や中国などを拠点に、ODAや日系企業の海外進出の支援などに携わっていました。十一年ほど勤めた後、平成十八年、高橋製瓦に入社しました。しかし、岐阜にあたって明るい想いばかりではありませんでした。「社名に製瓦とある通り、創業当時は瓦を作り、屋根工事業に従事していました。しかし個人や家族のライフスタイル・居住環境等目まぐるしく変容するなかで、製瓦業以外で何か別の新しい事業を立ち上げたいとの思いが強くなっていきました」

ちょうどその頃、長男が誕生。喜び勇んでベビーカーを探しはじめた高橋さんは、ある「もどかしい」気持ちになったと振り返ります。「探し始めてはみたものの、当時はかわいいデザインのベビーカーばかりで、私が使いたいと思う『カッコよくて、高性能なベビーカーにも積むことが出来ると大変好評でした。』



## 進化版「SCOO」

発売から六年を経た令和五年、道路交通法の改正があり、時速六キロ以下であれば立ち乗りでも公道が走れるようになりました。そこで座るタイプの電動カートは主にシニアや足が不自由な方が対象でしたが、立ち乗り型は若い方にも楽しんでいただけるのではないかと思索、利用の幅を広げるために、立ち乗り型の「スクーXT」を手掛けました。リゾート地や公園など観光客が広い敷地を巡るのに便利な足となる貸出用の乗り物として観光地に目を向けました。高橋さんは、観光地での採用を求めて沢山の場所に出向くうちに、観光客だけでなく、そこで働く人々にも需要があるのではないかと気づきました。ショッピングセンターや公園のゴミ運搬などの管理業務や広範囲の巡回警備に活用してもらえないのではないかと、更には工場部品や小型コンテナなど

カー」は全く見つかりませんでした。ちょっと気に入れば海外製で、サイズが日本の車に合わず持ち運びにも苦慮するなどしつくりこず、海外製は生活環境に合わないことを実感しました」しかしそんな現状が、高橋さんの好奇心を掻き立てることになりました。「それならいつそ自分で作ってみよう」これが新事業のはじまりとなりました。

## イクメンパパが散歩したくなる「ベビーカー」誕生

新事業「ベビーカーの開発」は、社内事業部として高橋製瓦の一角ではじまりました。製作にあたり、フレーム製作には車いすを製造している企業の協力を得ました。海外でも部品の一部を製作したため、その調整など、ベビーカーの安全基準をクリアするために試行錯誤を繰り返しました。

そして着手から二年を経て、平成二十二年、念願の『自分が使いたい』と思うベビーカーが誕生しました。その名も「CURIO」。キュリオシテイ(好奇心)という意味が込められています。

の運搬業務のサポートに役に立てるのではないかと。高橋さんは普段使用している手押し車や平台車をそのまま使用できるように、スクーにカスタマイズさせたフレームを繋げられるよう改良し、運搬できるようにしました。今では部品や荷物のためにスクーを採用している工場も出てきました。高橋さんは「スクー」をただの電動カートで終わらせたくなく、思っています。「スクーを使用することで工場内の部品配送はフォークリフトを使用しなくてもできるようになることが増えると思います。高齢者や女性にも重い荷物を直接運ばず運搬可能になったり、巡回が楽になるなど、人手不足の解消やシニア雇用につながるかと期待しています。『働く車』として活用してほしいのです」

## 分社化という進化

電動カートを世に出した同年の平成二十九年、高橋さんは高橋製瓦から乗り物事業全般を分社化させ、最初に手掛けたベビーカー名「キュリオ」を会社名とし、株式会社キュリオを設立しました。高橋製瓦は『美しい日本瓦の伝統

「育児中のパパ達が「これに乗せて子供を散歩に連れて行きたい」と思ってもらえるような、育児に参加しやすいベビーカーになったと思います。見た目だけじゃなく安全で楽しく使ってもらえるものになりました。世の中はちょうど『イクメン』という言葉が生まれた時でしたので、時代の波にうまく乗ることができ、開発するのに県や市の補助金を活用出来ました。お父さんが作った日本製のベビーカーということで、話題にもなりました」

## ベビーカーを「サステナブル」に進化

そのベビーカーの誕生から、すでに十五年が経ちました。高橋さんは今、その再利用に力を注ぎます。

「皆さん、子供が育った後のベビーカーってどうしているのでしょうか。綺麗に生まれ変われば次世代にも安心して使ってもらえる可能性も増えていきます」

を守っていききたい、そして自社ブランドの瓦を作り全国へ発信したい」と製瓦業に未来を感じた弟の秀太さんによって引き継がれています。

高橋さんは目下、「スクー」の技術をもとに製品の試作開発や量産化も進めています。大型ショッピングモールの館内の移動カートとしての活用も広がっています。「見た目や楽しいだけでなく、利便性も兼ねている。そんな乗り物をこれからも作っていききたいです」製品開発への飽くなき挑戦はこれからも続いていきます。

